

平安時代の複合動詞後項について

東 辻 保 和

はじめに

源氏物語の複合動詞の後項に用いられている動詞（以下「後項動詞」と呼ぶ。）について調べてみたところ、後項として用いられる度数が動詞によって著しく異なり、後項動詞には、それ独自の秩序の存在することがわかった。^(注1)

そこで更に考察の幅を拡げたく思い、源語以外に、竹取物語・伊勢物語・土左日記・古今集・かげろふ日記・枕草子・紫式部日記・大鏡・法華百座聞書抄に資料を求めて、「平安時代複合動詞後項索引稿(註2)」(以下「索引稿」と呼ぶ。)を作成した。

小稿は、それに基づいて一二のことを述べようとするものである。

第一節 後項動詞の順位

いま一例を挙げれば、「あかす」を後項とする複合動詞には、次のものが有る。但し、紙幅の関係で出典を省略する。

あそびあかす(以下「あかす」を省略する。) いひ、起き、おこなひ、おぼし、おもひ、かたらひ、きこえ、くらし、さとり、立ちつくり、ながめ、なき、なげき、なやみ、のたまひ、のしり、降り、まち、居^る

合計二十一種を数える。これを、「あかす」の異なり複合度数は二十一である、というように呼ぶことにする。この異なり複合度数は、語によって大小が有り、管見の範囲内では最小一より最大一三五にまで至る。

そこで、次に、後項動詞を異なり複合度数の大きいものから順次表示してみることにする。表のAは順位、Bは後項動詞、Cは異なり複合度数、Dは源語での順位、Eは源語での異なり複合度数である。なお、C欄の度数二以下は紙幅の都合で削除した。

	A	B	C	D	E
10	いづ		一三五	1	一〇九
9	果つ		一二三	2	九六
8	合ふ		九〇	4	六七
7	置く		八九	3	七一
6	ある(居)		八八	5	六一
5	く(来)		八三	10	四六
4	行く		八一	8	四九
3	ありく		七六	9	四七
2	そむ(初)		七一	7	五四
1	渡る		七〇	6	五五

ちがふ(四段) つかうまつる つどふ(四段) とがむ ならはす 並ぶ(四段) 残る まつはず まどはず やすらふ よろこぶ うごかす うしなふ うつつ 移る 起こす おはさうず およぶ(及) おる(下) かみ(交) くくむ くらぶ こもる さまよふ しづまる しむ(染) (下二段)

五五五五五五五五五五五五五六六六六六六六六六六六
 37 36 37 36 37 39 37 38 36 36 37 37 37 38 37 38 35 37 35 37 37 38 36 37 37 38
 四五四五四二四三三五五四四四三三四三六四六四四四三五四四三

住む たがふ(下二段) たはぶる 契る つつむ 流す のく(退) (下二段) のぶ(延) (下二段) 払ふ 触る 設く まがふ(四段) まぎる(下二段) 舞ふ 向ふ(四段) 漏らす ゆづる あがむ あかる(離) あやまつ いそぐ いぬ(往) うたがふ 送る 後る おこたる

四四四四四四四四四五五五五五五五五五五五五五五五
 38 38 38 38 40 37 39 37 38 37 37 37 37 36 37 38 37 38 39 40 36 38 37 37 38 36
 三三三三一四二四三三四四四四四五四三三四二一五三四四三五

源枕蜻紫大 とりいづ (1) さしいる (15) とりいる (15)
 " " " " 法 よびいづ (1)
 " " " " 大 詣でく (6)
 古伊源枕蜻紫 かきくらす (18) おもひしる (30)
 " " " " 土 見わたす (21)
 " " " " 源枕蜻紫大 たちとまる (44)
 " " " " 土伊源枕蜻紫 ゆきやる (11)
 " " " " 源枕蜻紫 さしよす (28)
 伊 " " " " まきあぐ (28) さしいづ (1) 見しる (30)
 " " " " " ききつく (22)
 " " " " " 法 行きあふ (5) ゆひつく (22)
 (6)五作品共通 (四十七語)
 竹伊源枕蜻 かへりいづ (1) かくれある (4)
 " " " " 大 いだしたつ (四段14) たちある (4)
 " " " " 蜻 たえいる (14)
 " " " " 古伊源蜻 なりまさる (15) 思ひをり (27)
 " " " " 枕 ふきかへす (24)
 " " " " 源枕紫大 おきあがる (42) かへりまある (32)
 " " " " " ひきあぐ (28) よびよす (27)
 " " " " " 法 いひある (4)
 " " " " 蜻大 みおこす (42)
 " " " " " 法 おちかかると (21)
 " " " " 蜻紫 おちある (4)
 " " " " 土枕蜻 みおくる (49)

古源枕蜻紫 せき敢ふ (19) たちいづ (1) 思ひみだる (38)
 " " " " " みえわたる (11)
 " " " " 大 思ひたつ (14)
 " " " " 紫 ききしる (30)
 " " " " 土伊源蜻 あけ行く (7)
 " " " " 源蜻紫 ゆきかふ (48)
 " " " " 竹源枕蜻 みすつ (24)
 " " " " 伊源蜻大 思ひなす (13) ゆきかへる (24)
 " " " " 土 " " " " おりある (4)
 伊源枕蜻紫 いひいだす (16) みいだす (16) 思ひいる (四段14)
 " " " " " いく (6)
 " " " " 大 いひやる (11)
 " " " " 紫 いひかわす (20)
 " " " " 法 まかりいづ (1)
 " " " " 蜻 さしあふ (四段5)
 " " " " 紫 " " " めしあつむ (31)
 源枕蜻紫大 おしあく、ひきあく (46) みあはす (下二46)
 " " " " " ひきいづ、ゐざりいづ (1) さしおく (3) なきまどふ
 " " " " " (19) おしはかる (50)
 " " " " " 法 " " " みいる (下二15)
 (7)四作品共通 (一一五語)
 伊源枕紫 おしいる (下二15) とりかへす (24) おきふす
 " " " " " (四段26) 大 まわりあつまる (42) よみいだす (16)

〃〃蜻 思ひうず (50) いひおこす (42) いひさわぐ (17)
 きつく (四段21)
 〃〃法 なげいる (15)
 〃蜻紫 引きむすぶ (50)
 〃紫大 みかはす (20)
 竹源枕紫 いであふ (四段5) おもひ起す (48) とり立つ
 (下二14)
 〃〃蜻 すべりいつ (1) まかりいる (四段14) 思ひなげく
 (40)
 〃〃大 みならふ (31) いひつたふ (38)
 〃〃蜻 いひおく (3) 思ひさだむ (43)
 〃〃法 きえうす (43)
 〃〃紫 あかしくらす (18)
 〃紫大 いでおはします (25)
 〃〃法 おほしめす (49)
 〃伊源枕 まどひありく (8) のほりゐる (4)
 〃〃大 生きいつ (1)
 〃枕蜻 おりく (6)
 古源枕蜻 まちいつ (1) かきくもる (49) ふりしく (51)
 みはつ (2)
 〃〃大 とび立つ (14)
 〃〃紫 あけ立つ (四段14)
 〃〃法 生ひいつ (1)
 〃蜻紫 成りはつ (2) 立ちわたる (10) むかひゐる (4)

〃〃大 思ひおく (3) ききわく (四段41)
 〃紫 つかへまつる (52)
 〃伊源蜻 とり敢ふ (19) すぎ行く (7) ちりかふ (48)
 くりかへす (24) ながめくらす (8)
 〃〃法 ゆきかよふ (29)
 〃枕紫 いひ知る (30)
 〃竹土源 漕ぎいつ (1)
 〃源枕 つげやる (11)
 〃土蜻 ふりはふ (49)
 土源枕 漕ぎ行く (7) 思ひく (6) いひしらす (41)
 〃紫 入り立つ (四段14)
 源枕蜻大 とりあつむ (31) 起きいつ、おぼしいづ (1) い
 ひ入る (下二15) 引きおろす (36) 引き掛く (24) さ
 しかくす (33) かきけつ (43) おしこる (51) 引き立つ
 (下二14) おはしましつく (四段21) まちつく (下二22)
 ひきつづく (四段42) ひきつづく (下二29) いひなす (12)
 おしのごふ (51) かへりみる (30) 引きよす (下二27)
 思ひよる (13) かすみわたる (10) まもりゐる (4)
 おしなぶ (52) かきはらふ (48)
 〃紫 思ひあなづる (50) いひあはす (下二23) 引きいる
 (四段14) 引きいる (下二15) 見聞く (44) はしりく
 (6) ゆきちがふ (四段47) いひつくす (34) かきな
 らす (46) さしのぞく (52) あけはつ (2) いひまぎ
 らはす (43) たちまじる (44) さしむかふ (48) なみ

ゐる(4)

〃紫大 みあぐ(28) こほれいづ、めしいづ(1) めし入る

(下二15) 引きかくす(33) 立ちさわぐ(17) したつ

(下二16) おしやる(11) とりわく、見わく(四段41)

〃蜻法 あゆみいづ(1) ねいる(14) ゆきつづく(21)

〃紫〃 ゐなむ(四段49)

〃蜻〃大 つたへきく(44) 思ひつづく(下二29) しなす(12)

〃〃法 しろしめす(49)

〃〃大〃 まかりかへる(24)

枕蜻紫大 おりのほる(32)

三作品共通以下は、紙幅の都合上、ここに書き連ねることを省略する。

さて、以上に掲げた作品間共通の後項動詞と順位との関係を見るために、十位毎の分布状況を表示すると次の如くなる。

六作品	五作品	共通	四作品	順位
7 (35.00)	14 (29.79)	28 (24.35)		1~10
4 (20.00)	14 (29.79)	26 (22.61)		11~20
8 (40.00)	9 (19.15)	18 (15.65)		21~30
	3 (6.38)	9 (7.83)		31~40
1 (5.00)	7 (14.89)	28 (24.35)		41~50
		6 (5.22)		51~52
20 (100)	47 (100)	115 (100.01)		計

十作品	九作品	八作品	共通	七作品
1 (100)	1 (100)	2 (40.00)	2 (33.33)	
		1 (20.00)	3 (50.00)	
		2 (40.00)	1 (16.67)	
1 (100)	1 (100)	5 (100)	6 (100)	

(一) は百分比

この表によれば、共通する作品の数が多くなる程、後項動詞の種類が減少するという当然と考えられる現象に伴い、順位においても、四作品共通の場合には、四十位、五十位台の後項動詞が多く見出されるのに対して、五作品共通の場合には、それらの比率が著しく減少し、六作品共通以上になると、六作品共通の一種を除いて一位から三十位までのものに限られ、更に、九・十作品共通においては、六位の「く」、一位の「いづ」が見出されるにすぎなくなる。これを更に子細に見れば、七作品共通では、一位の「いづ」から二十二位の「つく」まで、八作品共通では、六位の「く」から二十四位の「かく」までであることが判る。

以上の事実を、これを纏めて言えば、異なり複合動詞を多く形成し得ている後項動詞ほど、その複合動詞が多く作品間に共通して

使用される傾向にある、ということになるであろう。

第三節 後項動詞と源氏物語

平安時代の文学作品の語彙量において、源氏物語のそれが最大級であることは論を俟たない。そのことが、「索引稿」における後項動詞の順位にどのように影響しているかを考えてみたい。もっとも、後項動詞の順位としては、「索引稿」は五十二位、源語は四十位がそれぞれの最下位であるから、両者の順位の単純な直接的比較は、あまり意味を持たないと考えられる。

まず、後項動詞数について見ると、「索引稿」では七二七項を数えるが、その中、源語の占有しているのは五五一項、約七五・八％であり、他の一七六項、約二四・二％は源語には見られないものである。ここで、全異なり複合度数についても比較しておく、と、「索引稿」は四八一六、源語はその中の三三五五であって、即ち、源語の占有率は約六九・七％である。源語の及ばず影響は、概ね右の範圍にとどまるものと考えられる。

影響の及びかたを、いまいし具体的に述べてみたい。まず、源語の占有率が五十％以下の後項動詞群（Aグループと呼ぶ）を列挙すれば次の如くなる。（一）の数字は、上が「索引稿」での、下が源語での順位を示す。以下同様。

- 立つ (14・20) をり (28・38) あぐ (29・31) 笑ふ (40・40)
あつまる (42・37) つづく (四段42・36) おこなふ (44・38) 持つ (45・38) かたらふ、すごす、なく (46・38)
いたる、切る、下ぐ、垂る (47・39) くくむ、延ぶ (48・40)

のく (下二48・40) 往ぬ、きこゆ、くもる、栄ゆ、さぶらふ、そこなふ (49・40) います、受く、固む、くだく、恋ふ、死ぬ、つもる、連ぬ、とふ、取らす…… (50・40)

これらについては、源語の占有率が低く、源語内での順位も、一二を除けば最後尾かもしくはそれに近い。又、「索引稿」での順位も概ね後尾ではあるが、源語での順位は猶低く、両者は相当しない。就中、「をり」「笑ふ」「おこなふ」は極端な例となる。

「をり」は異なり複合二十五種の中、「おとしをり」「思ひをり」「のしりをり」の三種のみが源語の所用である。「をり」については、伊勢物語所用の十例が特徴的である。

「笑ふ」は、異なり複合十三種の中、「ささめき笑ふ」のみが源語の所用である。枕草子所用の九例が特徴的である。

「おこなふ」は、異なり複合九種の中、「あつかひおこなふ」「加へおこなふ」「執りおこなふ」の三種が源語所用である。

次に、源語の占有率八十％以上の後項動詞群（Bグループと呼ぶ。）を列挙すると左の如くなる。*印は占有率が百％であることを示す。

- いづ (1・1) なす (12・6) 寄る (13・11) おはす (20・13) すごす (23・14) おはします (26・17) 馳る (28・20) つづく (30・22) はなつ (31・21) 過ぐ (32・23) とどむ (32・21) ならふ (32・24) 隠す (33・25) さす入止▽ (33・23) おぼす (35・26) はなる (37・26) *つたふ (38・26) かしづく、ものす (39・28) みだる (39・29) 書く、なげく (40・29) *知らす (41・29) 分く (41・30) 散る (42・31) *なやむ (42・30) 消つ、定む、すさぶ (43・32) あらはす、

忍ぶ、まぎらはす(43・33) * のたまふ(43・31) 聞く、とま
 る、まじる、あまる(44・33) なぐさむ(45・34) * あつかふ
 * いとなむ*うとむ*ととのふ(46・34) あきらむ、あく、落
 つ、しづむ、絶ゆ、とどまる、鳴らす、へだつ、めぐらす(46・
 35) * 澄ます*おどろく*しづむ(47・35) おどろかず、去る、
 しむ、たづぬ、とがむ(47・36) 以下省略。

右の後項動詞は、上位のものにあつては、両者の順位差は零乃至
 十であるが、「はなる」以降は、占有率百分之の後項動詞はすべて順
 位差十二、その他のBグループは順位差十一になる。これを、両者
 の総順位差が十二であることに照せば、両者の順位は相当してい
 ると認められる。即ち、源語の占有率八十%以上の後項動詞につい
 ては、「索引稿」の順位に、源語の順位が強く影響していること
 なる。

そこで、「索引稿」の各後項動詞の異なり複合度数に占める源語
 の占有率を調べてみると次の如くなる。

※	後項数	占有率
33.84	246	100
2.34	17	99~90
6.46	47	89~80
9.22	67	79~70
9.22	67	69~60
8.39	61	59~50
1.10	8	49~40
3.99	29	39~30
0.96	7	29~20
0.14	1	19~10
0.14	1	9~

※後項動詞総数(七二七) に対する百分比。

上に述べたところにより、占有率百分之の後項動詞を核に、Bグル
 ープ約四二・六四%は、源語での順位が「索引稿」での順位に相当

しているのに対して、Aグループ約六・三三%は、両者の順位にす
 れが生じていることが認められる。そこで、その中間の占有率五十
 %乃至七十九%の後項動詞約二六・八%の場合を調べてみると、
 「くつがへる」(50・39)、「越ゆ」(50・39)、「さだまる」(50・
 39)等の如く、その順位差がBグループに近いものから、「かさぬ」
 (39・34)、「落す」(40・33)、「ちらす」(37・32)、「よろこぶ」
 (47・38)等の如く、Aグループに近いものまで含まれることが判
 る。

以上述べた如く、両者の間で順位変動の著しい後項動詞が若干存
 するが、その他は、多少のずれや前後の入れ替りは有りながらも、
 概ね両者の順位は平行しているものと考えられる。

注

- 1 拙稿「いわゆる複合動詞後項の意義論的考察―源氏物語を資
 料として―」(国文学攷 第六十九号所収)
- 2 (上) は高知大学学術研究報告 第二十七卷人文科学、(下)
 は同じく第二十八卷人文科学に所収。

(高知大学教授)